

今年1月5日の築地市場初市の様子。場内市場の水産物の取扱量は国内最大を誇る



築地のにぎわいを守る

～プロも観光客も集う“新市場”の開設をめざして～

平成27年度に築地市場が豊洲へ移転することを受け、中央区は、歴史ある築地の活気とにぎわいをこれからも継続していくために、場外市場に鮮魚や青果を販売する約100店舗の小売店が入る先行営業施設「築地新市場」の開設を計画しています。市場周辺に集まる約400店もの場外市場と協力して“築地ブランド”を守ります。

活気とにぎわいの
まち、築地

古くから続く魚市場

築地市場は都内に11ある東京都中央卸売市場のひとつで、水産物・青果物を扱っています。都が管理するこの市場は場内市場といわれ、そのまわりには隣接して場外市場と呼ばれる400もの店舗からなる商店街があります。

業者や料理人などいわゆるプロを対象とした、仲卸が軒を連ねる場内市場に対し、場外市場は卸売りを主としつつも小売りにも対応している専門店です。市場で働く人や市場に買い出しに来る人以外にも観光客・一般客も多く利用します。新鮮な肉や魚から海苔、お茶、乾物、刃物や食器類まで食に関するものなら何でも揃い、最近ではグルメスポットとして多くのメディアで取り上げられています。

日本橋のためには魚市場発祥の地の記念碑がありますが、江戸時代、幕府に魚を納めた漁師たちが残りを日本橋で売るようになったことからこの地で魚河岸がはじまったといわれています。明治時代、魚市場として千住、新場、日本橋、芝金杉の4か所が整備されま

今年6月、中央区と友好都市である山形県東根市が場外市場で「さくらんぼ種飛ばし大会」を開催した。東日本大震災後の販売促進のために場外市場ではじまったこのイベントも今年で3回目を迎えた



したが、都市の人口が増えるにつれ、取扱量や業者の数も増えて取引が乱れてきました。そして大正時代になり、公設の卸売市場として計画を進めていた矢先に関東大震災が起こり、日本橋魚河岸は幕を閉じることになりました。震災後、芝浦に仮設市場が設けられましたが、その後築地に移転し、東京都卸売市場として開設されました。

一方、場外市場も場内市場とともに発展してきました。もともと場外市場の一部がある場所は本願寺の境内で、震災後、場内市場の盛況に合わせてように自然発生的に関連商店が集まっにぎわうようになりました。

築地市場移転と先行営業施設

場内市場の水産物の取扱規模は世界最大で、昭和10年に開設されてから80年近く、隣接する場外市場とともに首都圏の台所として人々の食を支えています。開設から50年を超えた昭和の終わり頃から、場内市場は施設の老朽化や過密化等が深刻な状況になってきました。このため、都は現在地での再整備を検討してきましたが、平成10年頃からは場内市場を営業しながら工事を行う難度等により臨海部への移転整備を併せ検討するようになりました。

これに対し区は、長い年月によって培われた築地の伝統と文化を守るため、10万人を超える署名を集めるなどの移転反対運動を展開しました。しかし都は平成13年、江東区の豊洲地区へ移転することを決定し、現在、平成27年度中の施設しゅん工をめぐり準備が進められています。

一方、長年場内市場とともに築地のまちのにぎわいをつくりだしてきた場外市場では、場内市場が移転した後、築地のにぎわいをどう維持していくかが課題となります。

移転決定を受け、区では反対の姿勢を維持しつつも、平成16年に、移転後

のまちづくりについて「築地市場地区の活気とにぎわいビジョン」としてまとめ、400店舗ある場外市場とともに築地のにぎわいを継続していくために、プロや一般客が利用できる新たな施設を開設する構想を発表しました。

しかし、その構想は市場跡地の使用を前提としたものであることから、区では、築地のにぎわいを一時も途絶えさせないための移転直後の対応として、場外市場内にあるおよそ4000平方メートルの区有地（現駐車場）を活用した店舗施設の建設を計画しています。市場の移転で場内にいる仲卸も豊洲に

移ってしまうので、同じように水産物や青果物を売る店舗をこの施設に置くことで築地のにぎわいを守ろうというものです。

さらに開業時期も、築地のにぎわいや機能性を途切れさせないために、先行営業施設として築地市場移転の前にオープンする計画です。昨年6月には、区は場内・場外市場事業者、区内料理飲食業組合による「先行営業施設開設準備協議会」を設置し、施設の概要をはじめとして、取扱品目、出店者の募集条件、施設使用料など具体的なルールを協議してきました。

築地市場移転決定から「築地新市場」構想への主な経緯

- 平成13年12月 東京都が築地市場を豊洲へ移転することを決定
- 平成15年5月 東京都が「豊洲新市場基本構想」を公表
- 平成16年7月 東京都が「豊洲新市場基本計画」を公表
- 12月 中央区が「築地市場地区の活気とにぎわいビジョン」をとりまとめ、東京都へ「築地市場地区の活気とにぎわいづくりに関する要望」を提出、場外地区に鮮魚マーケット（先行営業施設）を開設する構想を示す
- 平成17年9月 東京都が「豊洲新市場実施計画のまとめ」を策定
- 平成18年1月 場外地区の2町会と3商業組合がまとまり「築地食のまちづくり協議会」を設立
- 2月 区内の商工団体や町会、築地市場関係団体、中央区、区議会などが参加し、移転後の築地の活気とにぎわいを守るための検討をすべく「新しい築地をつくる会」を発足
- 4月 中央区は先行営業施設開設に向けてさまざまな整備を行うため、「築地まちづくり対策本部」を設置
- 12月 「築地食のまちづくり協議会」が法人格を取得しNPO法人となる
- 平成21年2月 東京都が豊洲新市場予定地の土壌汚染対策工事に関する技術・工法などを踏まえ「豊洲新市場整備方針」を公表
- 平成22年10月 中央区が東京都へ「築地市場移転問題についての要望」を提出、400店舗が集まる場外市場と一体となってにぎわいを形成する「にぎわい施設」の構想を提案
- 平成23年11月 中央区が東京都へ「市場移転後の築地地区のまちづくりに関する要望」を提出、「食のプロ」に評価・利用され、観光客・一般客にも親しまれる施設をめざし、都の協力を要請
- 平成24年2月 築地市場移転後の築地のまちづくりについて中央区と東京都が合意
- 6月 中央区は「先行営業施設開設準備協議会」を設置
- 平成25年1月 東京都は豊洲新市場のしゅん工時期を平成27年度とすることを発表



場外市場初の総合案内所 情報市場ぷらっと築地



観光客も多く訪れるため、外国人対応の通訳も常駐している



一方、地元場外市場でも、平成18年1月、場外地区の2町会と3商業団体が一体となり、「NPO法人築地食のまちづくり協議会」が発足、歴史ある築地のにぎわいをより一層高めるために団結して取り組みはじめました。場

平成24年7月に、NPO法人築地食のまちづくり協議会により場外市場にオープンした総合案内所。日本橋や銀座など区内の飲食店の情報も閲覧できる。

場外市場では、5月に半値市、10月に築地秋まつり等のイベントが行われているが、これらのイベントの開催場所として利用されたり、場外市場を訪れる観光客・一般客向けに案内を行っている。

築地市場開場77周年を記念して平成24年から開始された七日市は人気のイベントで、毎月7日に開催されている。毎回テーマに沿った各店自慢の商品が紹介され、場外市場の逸品を知ることができる。



毎月7日に行われるイベント「七日市」。食のまち築地ならではのテーマで観光客・一般客を引きつける

●平成25年度(4月～10月)に開催された七日市

- 4月 鯖づくし……まぐろ解体ショーを実施
- 5月 味自慢玉子焼……場外市場の玉子焼を食べ比べ
- 6月 新茶・海苔……利き茶・利き海苔を体験
- 7月 築地を食べつくせ!!
……各店自慢の限定料理が勢揃い
- 8月 ビールがすすむおつまみ大集合!!
……珍珠・海産物などのおつまみを紹介
- 9月 ごはんのお供大集合!!
……漬物や佃煮などの試食販売会
- 10月 築地道具市……プロが選ぶこだわりの調理道具や食器を展示

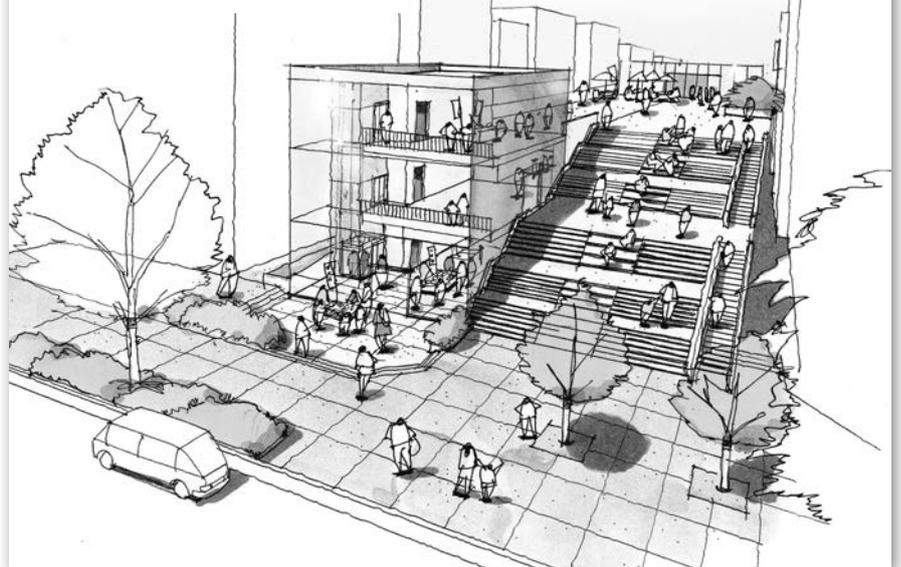
外市場の全店舗の参加によるさまざまなイベントを実施したり、また、東日本大震災の被災地は主要な農水産物の産地であることから、復興に向けた支援事業を行うなど「食のまち築地」として精力的に活動しています。

また、詳細はまだ決まっていますが、築地のにぎわいを高める取組として、買い物客の駐車料金サービスやポイントカード事業、歩いて数分の場所にある銀座へ買い物後に繰り出せるよう、購入したものを荷合わせして宅配便で配達できるサービス事業の実施に

急増している外国人観光客にも対応しています。

「情報市場ぷらっと築地」を開設しました。そこでは場外市場の店舗に関する案内や区内飲食店の検索ができるシステムを備え、食に関する情報を発信しています。合わせて、築地に精通したスタッフのほかに外国語ボランティアが常駐し、

「築地新市場」を晴海通り側から見たイメージパース図。3階の屋上広場へつづく階段が広がり、入ってみたいくなるようなアプローチとなる



向けて検討を進めています。さらに、2020年に開催が決定した東京五輪に向け、世界各国から集まるアスリートや観戦客に対し、築地としてどのようなおもてなしができるのか早くも検討ははじめています。

プロも観光客も集まる施設

先行営業施設「築地新市場」は、地

「築地新市場」の店舗内観イメージパース図。店舗が入る1階は、2階までの吹き抜けになっており、品物をゆったりと見てまわれる



2棟ある建物には連絡通路が設けられ、屋上広場の一体活用もできる

上3階建ての小田原橋施設（仮称）と地上2階建ての海幸橋施設（仮称）の2棟からなり、93の区画を設けて鮮魚や青果の店舗を配置する予定です。両施設は連絡通路により行き交うことができ、1階は店舗、2階は倉庫や事務所で、3階には多目的ホール、屋上には広場を設け憩いの場としての利用のほか、地域のイベント等にも活用でき

るようになります。この「築地新市場」は歩いてまわるのにちょうどいい広さで、高い交通利便性から都内の寿司店や料理店などのプロが買い出しに来やすいところです。また、場内市場が移転すると、水産物や青果物は全国から豊洲新市場に集まることとなりますが、その豊洲新市場にも近く商品の仕入れがしやすいとい

う立地を生かし、早朝から鮮魚や青果を豊富に揃えることができます。開業すれば、周辺に集まっている約400店舗もの場外市場と合わせて、食に関するものはすべて揃う場になります。現在の築地の人出は、早朝6時頃から10時頃まではプロの買出し人、11時頃から13時頃までは観光客でにぎわっています。今後、配送システムなど観光客が買い物をしやすい環境が整備され、また、新しくできる「築地新市場」が誰でも利用できる生鮮品の集合店舗であると認知されれば、午後は一般客を対象とすることも想定できます。

ことが求められます。都は移転後の市場跡地をどうするかをまだ明らかにしていませんが、その動向が場外市場地区のまちづくりにも地域のにぎわいを存続できるように再開発を望んでいます。

そうならば、銀座や日本橋を訪れる観光客や一般客が、プロが買いに来るまちで買い物をしよう」と気軽に立ち寄れるようになり、まち全体にさらなるにぎわいを生み出すことが期待できます。

築地には、日本橋魚河岸の時代から続く歴史や伝統、仲卸業者等の目利きによる品質への信頼、日本一の豊富な品揃え、プロの買出し人が認める評価そして集まる人々による活気やにぎわいなど、築地ブランド」とも称される魅力があります。

「築地新市場」は今後、平成25年度中に施設建築工事に着手し、出店者を募集する予定です。出店者には、プロの買出し人が求める新鮮で上質の食材を提供し、築地の伝統と文化を継承する

市場を利用している区内の飲食業界からも「ほとんどの食材を一括して仕入れることができるので築地を利用している」「銀座にも近く立地がいいので来やすい」「便利なのでこれからもよい品物が揃うならこちらへ来たい」という声が上がっています。

「築地ブランド」を絶やさないうために

市場利用者によっては豊洲まで足を伸ばすのが負担になってしまう場合もあります。そうした利用者にも今後築地へ足を運んでもらえるよう、また、観光客・一般客に対しても情報発信や周知を行い、「築地新市場」が築地ブランド」を次世代に引き継ぐまちづくりの基盤施設となることをめざします。